

用語「思考力」について

高木輝夫

1 「思考力」重視の経緯について

今回の学習指導要領の改訂は、文部大臣が教育課程審議会に対して行った諮問「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」に基づくものである。そこでまず、今回の改訂で「思考力」の育成が重視されることになった経緯について見ていくことにする。

まず、改訂のスケジュールは、昭和60年（1985）9月諮問、昭和61年（1986）10月中間まとめ、昭和62年（1987）11月審議まとめ、昭和62年（1987）12月答申、となっている。

その「答申」（昭和62年、1987）の「I、教育課程の基準の改善の方針」の「1、教育課程の基準の改善のねらい」には次のようにある。（以下、引用文中の下線は筆者による。）

(2) 自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視すること
(中略)

そのためには、児童生徒の発達段階に応じて必要な知識や技能を身に付けさせることを通して、思考力、判断力、表現力などの能力の育成を学校教育の基本に据えなければならない。とりわけ、新たな発想を生み出すものとなる論理的な思考力と想像力、直観力などを重視するとともに、科学技術の進歩や情報化の進展に対応するために必要な基礎的な能力の育成にも留意しなければならない。（*1）

そして、同じく「4、各教科・科目等の内容」の「国語」の「ア 改善の基本方針」には次のようにある。

（前略、国語に対する関心・国語を尊重する態度）その際、特に、情報化などの社会の変化に対応するため表現する能力と相手の立場や考えを的確に理解する能力を養い、思考力や想像力及び言語感覚を育てるようにする。（中略、教材について）その際、特に、自然や美しいものに感動することなど情操を豊かにすること、たくましく生きる態度を育てること、論理的思考力を育てること、我が国の文化と伝統に対する関心や理解を深めること、国際理解を深め国際強調の精神を養うことなどに役立つものを選ぶよう配慮する。（*2）

2 学習指導要領（平成元年、1989）中の「思考力」について

では次に、「思考力」という言葉が、平成元年に告示された学習指導要領（小学校・中学校・高等学校）中にどのように現れているか、見てみたい。

小学校学習指導要領では、二か所に現れる。まず、「第1 目標」には、

国語を正確に理解し適切に表現する能力を育てるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。（＊3）

とある。また、「第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の、3の教材選定の観点には、

(2) 思考力や想像力及び言語感覚を養うのに役立つこと。（＊4）

とある。

次に中学校学習指導要領では、二か所に現れる。まず、「第1 目標」には、

国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。（＊5）

とある。また、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の、3の教材選定の観点には、

(2) 思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにするのに役立つこと。（＊6）

とある。

そして、高等学校学習指導要領では、五か所に現れる。まず、「第1款 目標」には、

国語を的確に理解し適切に表現する能力を身に付けさせるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。（＊7）

とある。そして、残り四か所は、「国語Ⅰ」、「国語Ⅱ」、「国語表現」にある。

まず「国語Ⅰ」では、「1 目標」に、

国語を的確に理解し適切に表現する能力を養うとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる（＊8）

とある。また、「3 内容の取扱い」の、(5)の教材選定の観点には、

イ 思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨くのに役立つこと。（＊9）

とある。

次に「国語Ⅱ」では、「1 目標」に、

国語を的確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。
(*10)

とある。

そして、「国語表現」では、「1 目標」に、

国語で適切に表現する能力を高めるとともに、思考力を伸ばし言語感覚を磨き、進んで表現することによって生活を充実させる態度を育てる。 (*11)

以上のように、「思考力」は小学校、中学校、高等学校とも指導事項中ではなく、「目標」中と配慮事項中に現れる。

ところで、学習指導要領には「思考力」はほぼ同じ意味で使われていると思われる言葉が見られる。それは小学校、中学校、高等学校でそれぞれ次のように見られる。

小学校では、「思考する力」、「論理的な見方や考え方」の二つが、「第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の、前者は1の配慮事項に、後者は3の教材選定の観点に、

(7) 個々の児童の特性を生かした指導を行い、主体的に表現し思考し想像する力を育てるようにすること。 (*12)

(4) 科学的、論理的な見方や考え方をする態度を育て、視野を広げるのに役立つこと。
(*13)

とある。

中学校では、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の、3の教材選定の観点に、

(4) 科学的、論理的な見方や考え方を養い、視野を広げるのに役立つこと。 (*14)

とある。

高等学校では、「国語表現」の「3 内容の取扱い」に、

(4) 教材は、書くこと話すことの学習活動に役立つもので、特に論理的思考力を伸ばすのに役立つものを取り上げるようにする。 (*15)

とある。

これらの語もやはり「思考力」と同じように、指導事項中ではなく、配慮事項中に現れているこ

とがわかる。

では、学習指導要領の「目標」や配慮事項中に現れている「思考力」を具体的にはどう育成していけばよいのだろうか。

3 学習指導要領の指導事項における思考力の育成

先にも述べたように、教育課程審議会の「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」の「答申」（昭和62年、1987）の途中経過において「学習指導要領の要点（教育課程講習会・資料、文部省）（昭和63年8月）」（『日本教育新聞』、昭和63年8月6日及び13日付け資料版による。）が公表された。

これには小学校、中学校のものが掲載されている。その中から「思考力」という言葉の現れている部分を抜き出すことにする。（それぞれの末尾に〔学年・指導事項〕を示す。）

まず、小学校について見てみよう。

「1 教科目標改善の視点」には次のようにある。

エ 思考力や想像力及び言語感覚を育てる。（*16）

「3 内容改善の視点」の「(2) 各領域の内容改善の視点」の「表現」の領域には次のようにある。

イ 「主題意識」は、自分の考えの中心を的確に表現することの内容である。

。「話すこと」と「書くこと」との両面からの指導内容とし、思考力の育成に応じた上学年の事項とする。〔4・ウ、5・エ、6・エ〕（*17）

同じく「理解」の領域には次のようにある。

オ 「叙述に即した読み」は、叙述の細部まで注意して読むことの内容である。

。（略）

。「思考力の育成のため、高学年の指導内容として重視する。〔2・オ、3・オ、4・オ、5・エ、6・エ〕（*18）

ク 「感想・意見」は、聞いたり読んだりしたことについて自分なりの感想を適切に持つことの内容である。

。現行では文字言語のみに限定しているが、音声言語をもふくめ、思考力の育成を重視した内容とする。〔3・キ、4・キ、5・カ、6・キ〕（*19）

次に、中学校について見てみよう。

「1 教科目標改善の視点」には次のようにある。

エ 思考力や想像力及び言語感覚を育てる。 (*20)

「3 内容改善の視点」の「(2) 各領域の内容改善の視点」の「表現」の領域には次のようである。

キ 「語句の選択」は、語句の選択と使用についてのことである。文のまとめ方と関係づけて示し言語感覚と思考力の発達をめざす。〔1・オ、2・カ〕 (*21)

同じく「理解」の領域には次のようである。

キ 「想像・思考・鑑賞」については、想像力や思考力を伸ばし、文章を鑑賞する事項である文章への興味、関心を深める指導事項であり、読書への発展につながるので、読み手としての主体的な感想、意見をもたせることを重視する。〔1・カ、2・オ、3・カ〕 (*22)

ところで、高等学校については、小・中学校での「学習指導要領改善の要点（教育課程講習会・資料）」に相当するものは、公表されていない。そこで、高等学校段階における思考力の育成については、教育課程審議会の答申をもとにすべきだ、と考える。

以上のように、教育課程審議会の答申をもとに学習指導要領の指導事項における「思考力」育成について見てきたわけだが、教育課程審議会が示したものだけでは不十分である、と私は考える。

そこで次に、学習指導要領本文（指導事項）から、思考力の育成にかかわる語を含む部分について抜き出すことにする。今回取り上げた語は「考える」「整理する」「まとめる」などの動詞と、「順序」、「まとめり」、「区切り」などの名詞である。なお、学習活動を明確にするために、本文の文言を変えて引用する。（教課審の示したものと重なるものは括弧で括った。）

まず、小学校学習指導要領を見てみよう。

〔第1学年〕

A 表現

イ 経験した事の順序を考えて話す。

ウ 書くための事柄を考える。

エ 見聞した事、経験した事などの順序をたどって文章を書く。

オ 事柄を考えながら、（文や文章を書く。）

B 理解

イ 話の内容の大体を聞き取る。

ウ 語や文としてのまとめりを考えながら音読する。

エ 文章の内容の大体を読み取る。

〔言語事項〕

（該当なし）

〔第二学年〕

A 表現

- イ 事柄の順序を考え整理して話す。
- エ 見聞した事、経験した事の順序を整理して文章を書く。
- オ 事柄の順序を考えながら、文章を書く。

B 理解

- イ 話の順序を考えながら、内容を聞き取る。
- ウ 文章の内容を考えながら音読する。
- エ 時間的な順序、場面の移り変わり、事柄の順序などを考えながら、内容を読み取る。

〔言語事項〕

(該当なし)

〔第3学年〕

A 表現

- イ 区切りを考えて話す。
- ウ (必要な) 事柄を選び整理してから文章を書く。
- エ 事柄ごとの区切りや中心を考えてから文章を書く。
- オ 事柄と事柄との続き方を考えながら、語と語や文と文との続き方に注意して文章を書く。

B 理解

- イ 話の要点を聞き取り、自分の立場からまとめる。
- エ 文章の要点を正しく理解しながら、内容を読み取る。
- (キ 聞いたり読んだりした内容について、自分ならどうするかなどについて考える。)
- ク 自分の立場から大事だと思うことを落とさないで文章を読む。

〔言語事項〕

- (1)ア (イ) 適切な声の大きさや速さを考えて話す。
- オ (イ) 文や文章の中における指示語や接続語の役割と使い方に注意する。

〔第4学年〕

A 表現

- ア 内容の軽重を考えて話す。
- イ 話の中心点が分かるように、筋道を立てて話す。
- (ウ 自分の考えをはっきりさせたりまとめたりしてから話す。)
- エ (必要な) 事柄の順序や軽重を考え、整理してから書く。
- オ 中心点が明確になる書き方を考えて文章を書く。
- カ 段落を考えて書く。
段落と段落との続き方にも注意し文章を整えて書く。

B 理解

- ア 話の要点や中心点を書きとめながら話の内容を正確に聞き取る。
- イ 自分の感想をまとめてみる。
- エ 段落相互の関係を考えて、文章の中心的事柄を読み取る。
- ク 大事な事柄をまとめる。

〔言語事項〕

- (1)オ (ア) 文の構成について初歩的な理解をもつ。
- (イ) 文と文との意味のつながりを考えながら、指示語や接続語を適切に使う。

〔第5学年〕

A 表現

- ア (相手や場の) 状況を考えて話す。
- イ 意図をはっきりさせて根拠を明らかにしながら話す。
- (エ) 自分の考えを明確にする。
(表現することによって更に考えを確かにする。)
- オ 主題や要旨を考えて事柄を選び、観点ごとに整理してから書く。
- カ 構成を考えて文章を書く。
- キ 段落のはっきりした文章を書く。
段落相互の関係を考えて文章を書く。
- (ク 事象と感想、意見などを区別して文章に書き表す。)
- コ 聞いたり読んだりした内容から素材を選び、構成や叙述などの優れている点を参考にして表現する。

B 理解

- イ 話し手の意図を理解し、自分の意見や感想をまとめる。
- ウ 主題や要旨を考えながら内容を読み取る。
- (カ 話し手や書き手のものの見方、考え方、感じ方などについて理解する。)
- キ 必要な事柄を調べるため、また、必要な情報を得るため、文章を読む。
- ク 聞いたり読んだりした内容について、自分の立場から再構成して表現する。

〔言語事項〕

- (1)カ (ア) 文の中で語句の係り方や照応の仕方を理解して、いろいろな文の構成があることを理解する。
- (イ) 文と文との意味のつながりを考えながら、指示語や接続語を適切に使う。

〔第6学年〕

A 表現

- ア 時間や話題の順序などを考え、計画的に話す。
- イ 目的や意図に応じて適切に話す。
- (エ 主題や意図をはっきりさせ、表現することによって更に自分の考えを深める。)

オ 目的に応じて必要な事柄を集め、全体を見通し整理してから書く。

カ 全体の構成を考え、書いたりする。

キ 文や文章の組立ての効果を考えて文章を書く。

文章全体の流れを考えたりして書く。

(ク 根拠となる事象と感想、意見などを区別して文章に書き表す。)

コ 文章や話の内容、事柄などを要約したり敷衍したりして表現する。

B 理解

ア 事象と感想、意見の関係を考えながら、聞き取る。

イ 話の内容と自分の生活や意見とを比べながら聞く。

オ 事象を客観的に述べているところと、書き手の感想、意見を述べているところとの関係を押さえながら読む。

(キ 話し手や書き手のものの見方、考え方、感じ方などについて、自分の考えをはっきりさせながら理解する。)

ケ 聞いたり読んだりした内容について、目的に応じて再構成して表現する。

[言語事項]

(1)カ (ア) 文や文章にはいろいろな構成があることについて理解を深める。(※23)

次に、中学校学習指導要領を見てみよう。

[第1学年]

A 表現

ア 表現しようとすることについて自分の考えをまとめる。

イ 自分の考えに基づいて表現する。

ウ 自分の考えを正確に表現するために、必要な話題や題材を選び出す。

エ 全体の構成を考え、事実と意見、部分と全体との関係を考えて表現する。

オ 表現しようとする事柄や考え、気持ちにふさわしい語句を選ぶ。

ケ 自分の考えや気持ちを整理し、言葉遣いに注意して話す。

B 理解

ア 話や文章の要点と事柄をとらえ、必要に応じて要約する。

イ 話や文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分の見方や考え方を確かめる。

ウ 話や文章の構成や筋道を正確にとらえ、内容の理解に役立てる。

オ 文章の表現に即して主題を考えたり要旨をとらえたりする。

キ 場面、経過、論理の展開などに注意して読む。

ク 話合いにおけるそれぞれの発言を注意して聞き、話合いの方向をとらえて自分の考えをもつ。

[言語事項]

(1)エ 文章の中の段落の役割や文と文との接続関係などを考える。

(第2学年)

A 表現

- ア 表現しようとすることについて自分の考えを豊かにする。
- イ 自分の考えを深め、立場を明らかにして、表現する。
- ウ 自分の考えを的確に表現するために、適切な話題や題材を選び出す。
- エ 事実と意見、中心の部分と付加的な部分などの関係がはっきり分かるように全体の構成を工夫して表現する。
- ケ 自分の考えや気持ちを、相手や場の状況に応じ、適切な言葉遣いで話す。
- コ 話合いの方向をとらえて自分の考えをまとめ、その場の目的に沿って的確に話す。

B 理解

- ア 話や文章の展開に即して内容をとらえ、必要に応じて要約する。
- イ 話や文章の内容に含まれているものの見方や考え方を理解し、自分の見方や考え方を広くする。
- ウ 話や文章の中心の部分と付加的な部分とを区別して、論理的な構成や展開を的確にとらえ、内容の理解に役立てる。
- エ 文章の展開を確かめながら主題を考えたり、要旨をとらえたりする。
- (オ 自分の感想をまとめる。)
- カ 事実と意見、説明と描写などな表現の違いに注意して読む。
- キ 話の要点をとらえながら聞き、話の中心点を的確に聞き取る。
- ク 話合いにおけるそれぞれの発言の共通点と相違点とを聞き分け、自分の考えをはっきりさせる。

(言語事項)

- (1)エ 文の中の文の成分の順序や照応、文の組立てなどを考える。

(第3学年)

A 表現

- ア 表現しようとすることについて自分の考えを見直したり深めたりする。
- イ 主題や要旨がはっきり分かるように表現する。
- エ 意図が相手に伝わるように、根拠を明らかにし、効果的な論理の展開を工夫して表現する。
- カ (書いた文章を)読み手の立場を考えて表記や表現を検討する。
- ク 相手の立場や受け取り方を考えて話す。
- ケ 相手の立場や考えを尊重し、話し合いが目的に沿って効果的に展開するよう話す。

B 理解

- ア 話や文章の展開に即して内容をとらえ、目的や必要に応じて要約する。
- イ 話や文章に生かされているものの見方や考え方を理解し、自分の見方や考え方を深める。

ウ 話し手や書き手の考えの進め方をとらえ、内容の理解や自分の表現に役立てる。

オ 文章を読んで主題を考えたり要旨をとらえる。

それについて自分の考えをもつ。

(カ 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、まとまった感想や意見をもつこと。)

ク 話し手の立場や話の根拠を考えながら話の内容を的確に聞き取る。

〔言語事項〕

(1)ウ 文の中の意味の切れ目と続き方などを考える。

エ 文章の展開の仕方や文章のまとめ方などを考える。

(3)ア 目的や必要に応じて適切な形式や文字の書き方を考え、調和よく書く。 (*24)

次に、高等学校学習指導要領を見てみよう。

第1 国語 I

A 表現

ア 目的や場に応じて話題や題材を選び、自分の考えをまとめる。

イ 主題や論旨が明確になるように構成を工夫して話したり書いたりする。

エ 事実と意見、説明と描写の区別などに注意し、筋道を立てて話したり書いたりする

オ 目的に応じて適切な形式や文体を工夫し、話や文章をよりよく整える。

B 理解

ア 話や文章の主題や要旨を叙述に即して的確にとらえる。

イ 話や文章の構成や展開に注意して、話し手や書き手の考えの進め方や強調点をとらえる。

ウ 話や文章の内容を必要に応じて要約したり詳述したりする。

オ 話を聞いたり文章を読んだりしてものの見方、考え方を広くし、人間、社会、自然などについて考えを深める。

〔言語事項〕

(該当なし)

第2 国語 II ----- 「国語 I」に準ずる

第3 国語表現

ア 適切な話題や題材を取り上げ、それについて情報を収集、整理し、自分の考えを深めて、主題や論旨を明確にする。

イ 観察、調査などに基づいて、事実、状況などを正確に説明したり記録や報告にまとめたりする。

ウ 構想に従って材料を整理し、意見、主張などを筋道を立てて話したり書いたりすること。

- オ 形式や文体を整えて、通信、伝達などの文章を書く。
カ 優れた表現について主題、要旨、構成、修辞などを吟味し、自分の表現や推敲に役立てる。

第4 現代文

- ア 論理的な文章について、主要な論点と従属的な論点との関係を考え、論理の展開や要旨を的確にとらえる。
イ 文学的な文章について、主題、構成、叙述などを確かめ、人物、情景、心情などを的確にとらえる。
ウ 目的や内容に応じた様々な読み方を通して、文章の読解、鑑賞を深め、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりする。
エ 文体、修辞などと内容との関係を考え、表現上の特色をとらえる。
カ 文章や作品を読んで要約したり、感想をまとめたり、自分の考えを筋道を立てて話したり書いたりする。

第5 現代語

- イ 適切な発声、発音、抑揚、強弱、話す速度などを考えて、効果的に話す。
ウ 文章や文の組立て、語句の働き、表記の仕方などを身に付ける。

第6 古典Ⅰ

- イ 文章の構成や展開に即して、主題や要旨を的確にとらえる。
ウ 文章や作品に表れた人間、社会、自然などに対する思想や感情を理解し、ものの見方、感じ方、考え方などを豊かにする。

第7 古典Ⅱ ----- (該当なし)

第8 古典講読

- ウ 文章や作品に表れた思想や感情を的確に読み取り、生活や人生について考える。
エ 古典を読んで、日本文化の特質や日本文化と中国文化の関係について考える。(*25)

4 まとめと考察

以上、小学校、中学校及び高等学校の学習指導要領の指導事項で、思考力の育成にかかわると考えられるものを抜き出した。その結果、学習指導要領で「思考力」の育成という場合には次の三つのことを指している、と考えられる。

- ① 筋道を立てて考えること (いわゆる論理的な思考力)。

- ② まとまりを意識したり、まとまりを作ったりすること（ものごとを抽象化する能力）。
- ③ 他人の思想を理解したり、自分なりの思想を持つこと（思考の方法、思考の内容）。

井上尚美氏は「論理的な思考力」を次の三つに分類している。

- (1) 形式論理学の諸規則にかなった推論のこと（狹義）
- (2) 筋道の通った思考、つまりある文章や話が論証の形式（前提—結論、また主張—理由という骨組み）を整えていること
- (3) 広く直観やイメージによる思考に対して分析、総合、抽象、比較、関係づけなどの「概念的」思考一般のこと（広義）（*26）

①を「いわゆる論理的な思考力」と言ったのは、(1)と(2)にあたる。②と③は(3)にあたる。

②を「ものごとを抽象化する能力」と言ったのは、(3)の中でも「分析」、「総合」、「抽象」、「関係づけ」の思考を指す。つまり、ある事柄がどのような要素から成っているか「分析」したりその各々の要素が全体の中でどう位置づけられているか「総合」したり、各々の要素の「抽象」のレベルを「関係づけ」たりすることをいう。

③を、「思考の方法、思考の内容」と言ったのは、(3)の「比較」を指す。「批判的思考力」と言ってもよい。つまり、ものごとを主体的に考え、自分なりの思想を持ち、それと他人の思想を「比較」したり、「批判的」にもものごとを考えたりすることをいう。

①は「順序」等、②は「まとめる」等、③は「自分の立場」等の語を含んだ事項である。

この三つの観点で、抜き出した事項を学年別に整理してみると、〔表1、2〕のようになる。さらにこれを発達段階別にまとめたのが、〔図1〕である。

その結果から全体的に次のようなことがいえる。

まず、小学校低学年では①と②に重点が置かれ、③の指導は行われない。低学年に③がないのは発達段階からみて無理があるからだ、と考えられる。中学年では②にやや重点を置くものの、他とくらべると指導事項に偏りが少ない。高学年は③に特に重点が置かれ、②の指導はこれ以降あまり行われない。つまり、②の事項は、小学校中学年までに十分に身に付けさせなければならないことになる。

次に中学校は、ほぼ、小学校高学年を受け継いだような形になっている。

高等学校も、中学校とくらべると①に重点が置かれているが、小学校高学年、中学校の流れをくんでいる、といってよい。

また、小学校第1学年から高等学校の「国語I」までについて「A表現」と「B理解」の事項の分布について見ると次のようになっている。

- ①は「A表現」22「B理解」9で、「A表現」に偏っている。
- ②は「A表現」10「B理解」13で、ほぼ均等に現れている。
- ③は「A表現」30「B理解」27で、ほぼ均等に現れている。

このことから、①は別としても、全体としては思考力の育成を表現の領域と理解の領域でバランスよく行おうとしていることがわかる。

さらに、これらについて発達段階別に見ると次のようになっている。

- ①は小学校に表現の事項が偏り、中学校以降に理解の事項が偏っている。
- ②は表現の事項は小学校に偏っているが、理解の事項は均等に現れている。
- ③は表現の事項は中学校以降に偏っているが、理解の事項は均等に現れている。

このことから、小学校では①、②を表現の領域で重点的に指導し、中学校以降では①を表現の領域で、③を理解の領域で重点的に指導しようとしていることがわかる。

最後に、小学校から高等学校までの学習指導要領において、思考力の育成にかかわる事項とそうでない事項がどういう割合になっているか、見てみることにする。その際、小・中学校と高等学校の「国語Ⅰ」では「A表現」と「B理解」の事項についてくらべ、それ以外は全部の事項についてくらべた。

小学校は第4学年から第6学年の「A表現」で思考力の育成にかかわる事項の方が多いが、全体としては、ほぼ同じ割合になっている。

中学校は全体的に思考力の育成にかかわる事項の方が多い。

高等学校は「現代語」「古典Ⅰ」「古典講読」を除いて、思考力の育成にかかわる事項の方が多い。

このように見てくると、特に小学校中学年あたりから国語の指導事項全体の中で、思考力の育成が重視されてくる、といえるのではないだろうか。そして、〔言語事項〕を除いた国語の指導事項全197項目中思考力の育成にかかわる事項が122項目であることから、国語という教科における思考力の育成は非常に重要である、といえるだろう。

〔表1〕 学習指導要領における「思考力」育成の指導事項観点別分類表（その1）

		①	②	③	他	
小	第1学年	A表現 B理解 〔言語事項〕	イエ	ウオ イウエ		
	第2学年	A表現 B理解 〔言語事項〕	イエオ イエ		ウ	
	第3学年	A表現 B理解 〔言語事項〕	オ (1)オ (イ)	イウエ	イエキク	(1)ア (イ)
学	第4学年	A表現 B理解 〔言語事項〕	イエ エ (1)オ (イ)	アオカ アク	ウ イ	
	第5学年	A表現 B理解 〔言語事項〕	カキコ (1)カ (ア) (イ)	キ	アイエエオク イウカク	
	第6学年	A表現 B理解 〔言語事項〕	アオカキキ (1)カ (ア)	コ	イエク アイオキケ	
校						

〔表2〕 学習指導要領における「思考力」育成の指導事項観点別分類表（その2）

			①	②	③	他
中 学 校	第1学年	A表現 B理解 (言語事項)	<u>エ</u> ウキ (1)エ	ア	アイウ <u>エ</u> オケ イオク	
	第2学年	A表現 B理解 (言語事項)	<u>エ</u> ウエ (1)エ(3)ア	アオキ	アイウ <u>エ</u> ケコ イカク	
	第3学年	A表現 B理解 (言語事項)	<u>エ</u> ア (1)エ	<u>イ</u> オ	ア <u>イ</u> エカクケ イウ <u>オ</u> カク	(3)ア
高 等 学 校	国語Ⅰ	A表現 B理解	<u>イ</u> <u>エ</u> オ イ	アウ	ア <u>エ</u> イオ	
	国語Ⅱ					
	国語表現		<u>ウ</u> カ	イ <u>カ</u>	ア <u>ウ</u> オ <u>カ</u>	
	現代文		<u>ア</u> イ <u>カ</u>	<u>ア</u> イ	<u>ア</u> イ <u>ウ</u> カ	エ
	現代語		ウ			イ
	古典Ⅰ		イ <u>ウ</u>		<u>ウ</u>	
	古典Ⅱ					
古典講読				ウエ		

※「各学年の目標」は分類の対象からはずした。指導事項が二つ以上の項目にわたるものには、下線を付け、同一項目に二つ以上の指導内容を含むものは記号を重ねて示した。なお、「他」は①、②、③のどれにも属さないことを示す。

〔図1〕 学習指導要領における「思考力」育成に関する指導事項の分布状況

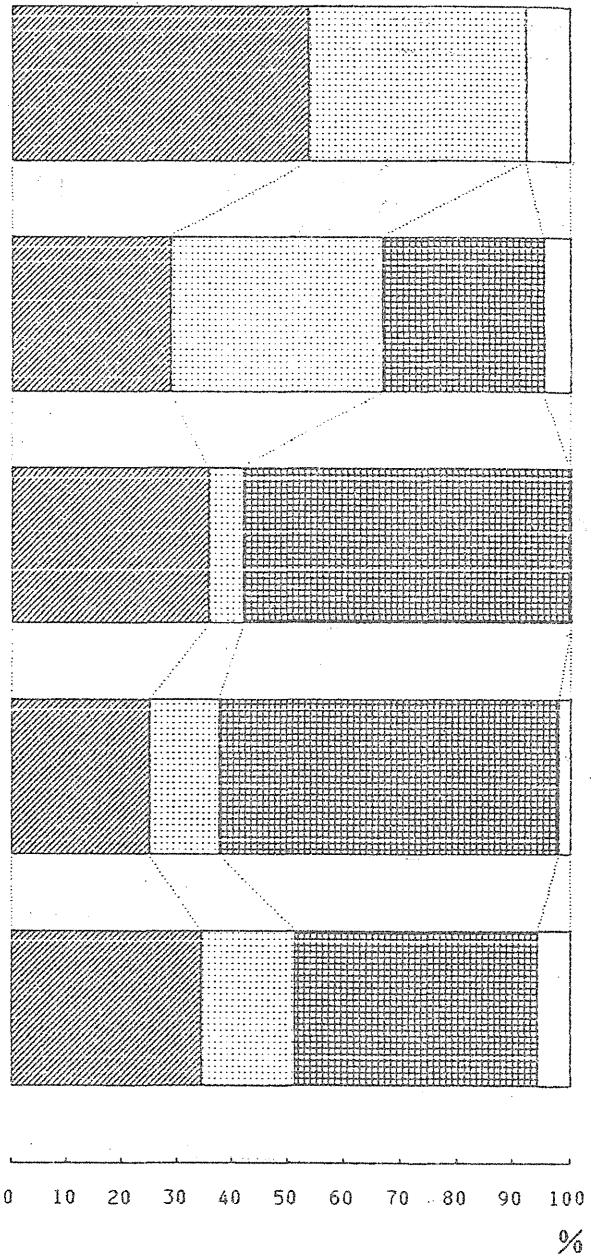
〔小学校低学年〕 13項目、のべ13
 ① 7 (53.8%)
 ② 5 (38.5%)
 ③ 0 (0.0%)
 他 1 (7.7%)

〔小学校中学年〕 21項目、のべ21
 ① 6 (28.6%)
 ② 8 (38.1%)
 ③ 6 (28.6%)
 他 1 (4.7%)

〔小学校高学年〕 31項目、のべ31
 ① 11 (35.5%)
 ② 2 (6.4%)
 ③ 18 (58.1%)
 他 0 (0.0%)

〔中学校〕 43項目、のべ48
 ① 12 (25.0%)
 ② 6 (12.5%)
 ③ 29 (60.4%)
 他 1 (2.1%)

〔高等学校〕 25項目、のべ35
 ① 12 (34.3%)
 ② 6 (17.1%)
 ③ 15 (42.9%)
 他 2 (5.7%)



- (*1) 『日本教育新聞』日本教育新聞社、昭和63年(1988)1月16日、教育課程審議会「幼稚園
小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について(答申)<昭和62年(1987)
資料版、2ページ
- (*2) (*1)の書、6ページ
- (*3) 『小学校学習指導要領(平成元年3月)』文部省、平成元年(1989)3月、文部省印刷局
5ページ
- (*4) (*3)の書、23ページ
- (*5) 『中学校学習指導要領(平成元年3月)』文部省、平成元年(1989)3月、文部省印刷局
7ページ
- (*6) (*5)の書、16ページ
- (*7) 『高等学校学習指導要領(平成元年3月)』文部省、平成元年(1989)3月、文部省印刷
局、11ページ
- (*8) (*7)の書、11ページ
- (*9) (*7)の書、13ページ
- (*10) (*7)の書、13ページ
- (*11) (*7)の書、14ページ
- (*12) (*3)の書、22ページ
- (*13) (*3)の書、23ページ
- (*14) (*5)の書、16ページ
- (*15) (*7)の書、15ページ
- (*16) 『日本教育新聞』日本教育新聞社、昭和63年(1988)8月6日、文部省「学習指導要領の
要点(教育課程講習会・資料)」資料版、2ページ
- (*17) (*16)の書、3ページ
- (*18) (*16)の書、3ページ
- (*19) (*16)の書、3ページ
- (*20) 『日本教育新聞』日本教育新聞社、昭和63年(1988)8月13日、文部省「学習指導要領の
要点(教育課程講習会・資料)」資料版、1ページ
- (*21) (*20)の書、2ページ
- (*22) (*20)の書、2ページ
- (*23) (*3)の書、5ページ～21ページより
- (*24) (*5)の書、7ページ～14ページより
- (*25) (*7)の書、11ページ～19ページより
- (*26) 井上尚美「言語論理教育入門—国語科における思考—」明治図書、平成元年(1989)年刊
32ページ